竹島渡航記日（五）

旅行者　某生

▲竹島は二個の大なる島からなつて居る一島は高さ四百尺他の一島は凡そ二百六十尺高い方の島は到底登ることは出來ない低い方の島の西部には小石の多い砂濱がある漁船は多く此場所に繫く砂礫の上まは二間四方程ある小舍を建つ小舍の南方岩に掛けたる階子あり之を傳ふて山に登るへし道と云ふ道は少しもないのてある登ること凡そ二十間にして絶壁あり瞰下すれば海水は其下に襲ひ來り怒濤渦を卷く架するに丸太木を以てす長さ二間之を踏んて對岸の岩に取り着くのてある同行者に一人あり顏色灰の如く遂に渡らすして歸れり此異樣なる橋を渡れば何ぞ知らん益危險なる場所に向はんとは

▲凡そ山に登り谷を越ゆる際には隨分危險なる所も少なくないものてある我輩も從來屢々箇樣なる危險を冒したるものである所が如何なる危險なる場所ても距離さへ短かければ隨分通過さるゝものてある然るに此島の樣に初めから終りまて氣も心も離すとが出來ない樣ては精神疲勞してやりかぬるものてある數十仞の絶壁足もかゝらない樣な岩の上ま足を踏み手をかくれば崩るゝ樣な岩ま手をかけて這ひ〳〵登らなければからない倒さまになつて下らなければならない箇樣な危險を冒した所て何の利益もなければ馬鹿〳〵しい話た一層或る人の如くに止めた方が利益てあろう？と思つては見たが又思ひ直して發掘したのてある人の登る所てさへあれば我も出來さらめやはと考へたさて凡そ三分の二まて取り着いたらんと思ふ所から漸く危險が減したのてある彌絶頂に至つて初めて安心した安心した計りてはあく其實に意外なことがあつた非常なる利益を見出したのてある實ま之てなければならないと思つた千仞の効は一箕よりと興味限りなかつた此利益と云ふのは即ち學問上の利益てあつた之は後日取り絡めて話す積りてあるさて絶頂にある人を數へて見たならば神西事務官東島司岡崎岡雪吹中井松浦和泉の八氏てあつたよく〳〵諸君は登られたと感心の至りてあつた海とは異なつて岡君の元氣はなか〳〵てあつたが松を採つて紀念の爲めに植えられた

午后よりは風稍強く浪も亦高いので隱岐に歸ることは頗る困難である夫れ故止むなく鬱陵島に避難することにあつた西北の方向を取つて隱岐丸は進んた凡そ六時間を經て鬱陵島に近ついた

▲暮色蒼然山上遙かに燈光あるもの二點鎌月は西の水平線の上幽かに糸の如くに釣られたり滊笛一聲異域の山にとゝろき渡り鬱陵島の農民今や驚倒して居るてあろう

▲西風は意外に強かつた爲め幾回か舵は水を離れた隱岐丸は風を避けて苧洞の濱近く着いた此時午后八時半慨むらくは暗黑にして思ひ思つた所の朝鮮國の鬱陵島が見えない見台の嫁の當てが外つれた樣な心地がした船て又一夜を明かさねばならない！

山陰新聞（現山陰中央新報）
1906年04月12日